

Tea Times

お茶の水女子大学広報誌 ● Tea Times ● May 2004

9

CONTENTS VOL.9

特 集

国立大学法人 お茶の水女子大学

「国立大学法人 お茶の水女子大学」の出発 …… ②

理事・副学長紹介 …… ③

機構紹介① — 教育機構 — …… ④

生活科学部本館の改修(第I期)が終了しました …… ⑤

●生活科学部に管理栄養士養成課程が発足 …… ⑥

●梨花女子大学へ留学して …… ⑥

●お茶の水女子大学 貴重資料紹介 …… ⑥

ミャンマーの麻薬地帯の消滅のための活動 …… ⑦

●理学部一般公開 お茶の水博士の体験授業 …… ⑧

●退職教員 紹介 …… ⑧

●新任教員 紹介 …… ⑧

●公開講座のご案内 …… ⑧

●大学の暦 …… ⑧

■編集後記 …… ⑧

特集 「国立大学法人お茶の水女子大学」の出発

お茶の水女子大学 学長 本田 和子



「国立大学法人お茶の水女子大学」誕生おめでとー！

ここ数年、国立大学は、法人化の可能性を巡って、あるいはその是非に関して、様々な論議をくりかえしてきたが、漸く、その幕が上がった。本学は、統合も再編もせず、一、二九年の歴史に幕を降ろすこともなく、「国立大学法人お茶の水女子大学」としてスタートする。国籍年齢を問わず、学ぶ意欲のあるすべての女性のために、その真摯な夢の実現の場を目指して……。とりあえずは、その出発に祝意を表しておこう。

法人化の必然として、大学には制度設計上の種々の変化とそれに伴う運営上の変革が要求されよう。ところで、それらをプラスに機能させ得るか、あるいは、ただマイナス要因とのみ機能させてしまうかは、ひとえに個々の法人と大学の構成員の力量に委ねられている。

国立大学のすべてが、国の方針によって、しかも、国家的目標と国家による予算運営のなかで守られていた時代、世に言う「護送船団方式」は終わった。これからは、個々の大学は自ら固有のミッションを掲げ、その実現に向けて努力することが要求される。しかも、その成果を国民の前に説明する責任が生じ、国民の付託に応え得たか否かを評価されねばならない。法人化後といえども、個々の大学が少なからぬ国費で維持されている以上、このことは当然果たさねばならぬ責務に他ならないだろう。

「中期目標」を明文化し、それに伴う「中期計画」を具体的に掲げて公表するのもこのことに由来する。本学のような小規模大学であっても、年間数十億の国費を消費するからには、それをどのような目的のために、どのような目標を掲げて、どのような計画に行使するかを説明することは、当然と言えば当然の義務に過ぎない。従来、それを怠ってきたこと、つまり、「国立大学」という特権の下に、多少なりとも自己満足的な閉じられた営みに終始してきたことこそ反省すべきであろう。もちろん、「学術文化の探求」なるものが、少なからず自己満足的な営みであり、その自己満足的な営みの結果として、人と社会に貢献し得る成果

が得られるということも、また、一面の真理ではあるけれど……。

本学は、わが国最古の女子高等教育機関として、小規模ながら一定の研究レベルを維持し、優れた女性の育成という教育成果を上げてきている。今後とも、この伝統を踏まえ、従来にもまして、女性の成長に相応しい教育研究の環境を用意し、「教育と研究」双方のバランスを取りつつ、女子の資質能力の開発とその社会的還元という使命を達成していこうとしている。男女共同参画が謳われ、持続可能な社会の発展は女性の参画抜きに達成し得ないとされながら、その動きの究めて鈍いのがわが国であることを思うなら、指導的な女性の育成は、新しい時代が求めるグローバルでかつ国益にも適った重要な課題に他なるまい。したがって、この課題達成のために、国費が充たされることは究めて当然と肯定し、本学が女子大学として存在することに意義があると自画自賛して置くこととしよう。

というわけで、とりあえず、存続意義も明確化されたし、目標も定まった。あとは、一同、心を合わせて努力するだけ……。幸いなことに、現在の本学は、よく足並みの揃った大学として評価されている。ある識者によれば、法人化の仕組みが成功するのは、「小規模」で、ある程度「レベルが高く」、「大都市に存在する大学」であるという。となれば、本学こそその好適例。ならば、前途洋々、かつ多難、あるいは、前途多難、かつ洋々……。ま、ともあれ、法人化を好機到来と捉えて、元氣よく船出することとしよう。

理事・副学長 紹介

お茶の水女子大学には国立大学法人法によって学内理事三名、学外理事一名がおかれ、学長、副学長と共に役員会を構成しています。また、学内理事と副学長は、本学の運営を担う四つの機構の各機構長を兼任しています。各理事・副学長に紹介と今後の抱負を述べていただきました。



学内理事 教育機構長
市古 夏生

過去三年間、副学長として教育、学生支援、入試分野を担当してきたので、特に新たな抱負というものはありません。ルーティンワークとしての業務をミスなく遂行すること、学生の視点から改革を行うことという二点を大切にします。幸いなことに、室長に人材を得ましたので、今年度一年間で不具合が大いに改善されると思います。



学内理事 総務機構長
松本 勲武

名門の良い伝統を引き継いでお茶大をさらに発展させていくには、たゆまぬ改革の努力が求められます。改革には変化がともないますが、"Everybody loves progress, but nobody likes change."が世の常のようです。変える、変えないに関して、"Serenity Prayer"がすく

引用されます。私もは受け身ではなく、主体的に改革を進められればと願っています。本田学長が常々表明されているように、「すべては私どもの決意と意欲にかかっている。」



学内理事
国際・研究機構長
室伏 きみ子

「世界に羽ばたいて…」

この二年間、理学部長として、国立女子大学の理学部の在り方について検討を重ね、これまでの本学の伝統の上に、魅力ある新しい学問と教育の場を再構築する事を目指して来ました。四月から、国際・研究担当理事を仰せつかりましたので、本学が国際社会でどの様な貢献をし、また、どの様な世界レベルでの研究を開花させられるかを、教職員や学生の皆さんと共に考え、そのための実践・活動をしていきたいと思っています。

学生の皆さん、お茶の水で、豊かな知性を身につけ、独自の学問・文化を花開かせましょう。そして、様々な分野でリーダーとして活躍できる女性となつて、世界に向かって大きく羽ばたいて下さい。若い皆さんが、広い国際社会で、なくてはならない存在となるために、私たちはお手伝いを惜しみません。



副学長 学術・情報機構長
附属図書館長
山本 秀行

お茶大のほぼ中央に、滝のある快適な広場が誕生しました。この憩いのある

空間を取り囲むように、右手には総合情報処理センターのパソコン室、語学自習室、マルチメディア教室があり、正面の丘の上には附属図書館が広がっています。これらサーヴィス施設と、この『Tea Times』を担当するのが緑の下の力持ち、学術・情報機構です。



学外理事
(現数理科学振興会理事)
廣中 平祐

女子の高等教育の要望は特に十九世紀後半から世界的に指数的に増大したようだ。日本で、お茶の水女子大学が果たした役割は甚大であった。米国では、私の滞米中の一九六〇〜一九八〇において、優秀な女性オピニオンリーダーたちの活躍は実に顕著であった。彼女たちの発言は男女を問わず若者の人生観・社会観・世界観に強い影響力を発揮していた。

一九七〇年代から始まった男女共学の浸透やフェミニズム運動の拡大は米国流の勢いで幕進したが、やがて行き過ぎの反省もあって、教育環境における差異化と多様性を尊重する思想が広く支持を取り戻しつつある。

理学の人間である私にとって、米国の理数系初等中等教育において女子にとつての適性環境が見直されていることは興味深い。私と仲間が始めて今年で二五年目を迎える高校生「数理の翼セミナー」のOB達の間では、女性メンバーの活動と貢献が素晴らしい。女性の高等教育は日本が国家として成熟を続けていくために肝要であり、お茶の水女子大学の存在に大きな期待を寄せるところである。

特集

機構紹介① — 教育機構 —

お茶の水女子大学は、法人化を迎え、十一の室から構成される四つの機構組織を中心に運営されることとなります。そこで、これから四回にわたり各機構を紹介していきます。

今回は、教育推進室、教育推進室、学生支援室、入試推進室から構成される教育機構を、それぞれの室長に紹介していただきます。

「少人数教育」を生かして

教育推進室長 塚田 和美

四月、新入生のまぶしいばかりの瞳に私たち教員も教育への思いを新たにする時節です。そして教育推進室もスタートしました。大学における教育機能の重要性はいうまでもなく、当室の責任の重さを感じています。しかし、考えようによっては方針はシンプルで良いのかもしれない。優れた学識を持つ教員がたくさんいて、一方学びたいという志をもった学生がいる。それだけでも学び成長する場が成り立つわけです。当室は出会いの機会を提供することを考えればよいでしょう。

いくつか具体的に。本学の特徴は何といっても「少人数教育」です。「少人数教育」を実施できるという恵まれた環境を学生教員の協同でもっと生かしていかなければと考えています。入学したばかりの学生を対象に、自ら学ぶ態度を身につけることなどを目的とした「基礎ゼミ」が開講されます。この基礎ゼミをさらに充実発展させていきます。ある一つのテーマ（コア）を中心に授業科目群（クラスター）を構成してコースとして設置するコア・クラスターというユニークな制度が数年前から始まりまし

た。例えば「コミュニティ・ボランティア」コースでは、「NPO入門」、「女性の起業と社会貢献」、「介護福祉論」などの授業が用意され、大学が協定を交わしたNPOで実習も行います。このコースは昨年度から始まったのですが、学生の評判も上々のようです。学生の関心に応え、学ぶ意欲を引き出すカリキュラム編成に努めます。

学生支援室の今年度活動方針

学生支援室長 宮田 敬一

学生支援室の主な業務は、学生相談、学生への経済的支援、就職、自治会・サークル活動の支援です。その中でも、特に、今年度は学内のメンタル・ヘルスシステムの整備に焦点をあて、活動を展開します。学内には、大きく分けると、学生のための各種相談室と地域の人たちのための有料の心理臨床相談センターの二つの組織があります。学生のためのサービスとして、学生相談、留學生相談、ピア・サポート、院生の研究相談、保健管理センター、セクハラ相談があります。また、附属校園の子どもと家族のためのスクールカウンセリングもスタートしています。さらには、今後、職員のメンタルヘルス・サポートも考慮されています。一方、外の地域社会に開かれた相談組織として、大学院附属の心理臨床相談センターがあり、発達臨床心理学コースの教員と院生が中心となり、乳幼児から成人・老人に至るまでの心理相談サービスが低料金で実施されています。もちろん、学生支援室の業務は学生のための各種サービスの質の向上にあります。そのためには、まず、学内向けの各種相談サービスをより体系化し、相互に連携しあうネットワーク作りが必要でしょう。次いで、学外向けの心理臨床相談センターとも連携することで、

本学の総合的なメンタルヘルス・システムを構築できるでしょう。この新たなメンタルヘルス・システムの構築が効果的な学生支援と社会貢献につながると考えています。

入試推進室紹介

入試推進室長 益田 祐一

国立大学の法人化にあたり、お茶の水女子大学に四つの機構がおかれ、それぞれの機構にいくつかの“室”が発足しました。入試推進室は教育機構のもとにおかれた“室”のひとつです。入試は、教員組織と事務組織が共同で行う毎年のルーティーン業務としては、もともと大きなもののひとつです。これを合理的かつ適切に進めていくためには、教員組織、事務組織相互の交通整理がきわめて重要であり、これが入試推進室の重要な仕事でもあります。このような交通整理は、今後入試に関する新たな方法の企画、検討を行っていく上でも不可欠です。

入試は学生を受け入れる門であり、ある意味で、大学が社会に向かって開いている最も重要な門でもあります。現在本学でも数多くの入学試験を行っています。それは、この門の開閉のタイミングや、入り口の大きさや形の違いといったように捉えられ、入試方法の検討というのも、そのような側面が考えられがちです。しかしながら、大学受験に対する社会的な批判や、状況の早い変化などを考えると、いざ近い将来、大学はこの門を開き社会に向かってしみ出し、また社会は門の中にはいりこみ、このミキシングゾーンの中での様々な相互作用をつうじて、本学に受け入れる学生を決定するような要素が、入試という枠組みの中でも大きくなってゆくであろうと考えられます。このような状況に対する準備も本推進室の課題であると考えられます。

生活科学部本館の改修 (第Ⅰ期)が終了しました

昨年九月から行われていた生活科学部本館の改修工事(第Ⅰ期)が、今年二月に終了しました。

昭和七年に建設されたこの建物は、全面スクラッチタイル張りで、正面には人造石のレリーフが装飾されており、本学のシンボリックな建物となっています。今回の改修は建物全体の半分となりましたが、最新の設備を取り入れ機能向上を図りながら、伝統ある建物の雰囲気が残る建物へと生まれ変わりました。

▲右側が改修部分。窓枠、レリーフ、雨どいの色が異なるのがわかります。

大学会議室(右上)は、建設された当時から貴賓室として皇室をはじめ、各要人の応接に利用されてきました。改修では、貴賓室の雰囲気を保つため、絨毯や壁紙が復元製作されています。また、階段教室(右下)も女子高等師範学校当時の趣を残した教室となりました。中庭(左上)の枝垂れ桜はそのままですが、掲示板、スロー



プ、ベンチが新設され、学生や教職員の憩いの場となりました。芝生と煉瓦との境界線には、工事で撤去された床材が再利用されています。生活科学部食物栄養学科に管理栄養士養成課程が設立されたことに伴って、給食実習室(左下)が整備されました。改修に際し、学内から植栽計画アドバイザーとして山下貴司理学部教授と建築アドバイザーとして田中辰明生活科学部教授が参加され、さらに、学外アドバイザーとして東京工業大学大学院の藤岡洋保教授(日本建築学会建築歴史・意匠委員会メンバー)をお迎えしました。

藤岡学外アドバイザーからのコメント

国立大学法人では、お茶の水女子大学生活科学部本館(一九三二)のように戦前の建物を保存活用するのはまた例外的なので、その「先駆性」が注目される。国立大学法人にとって、キャンパスを整備することは大学のプレゼンスを示す意味で重要で、その一環として歴史的建造物を保存活用することは、その大学の歴史や個性をアピールするという点でも意義があると考えられる。

この建物には、一九三〇年代の高等教育機関の本館の特徴、具体的には、左右相称の平面・立面、中央玄関部の強調が見られる。それらは威厳の表現を意識したものである。なお、当初の窓は、現状とは異なり、縦長が二連になった窓だった。

研究室面積を前より狭くはできなかったためにパイプ・スペースを廊下側に設置せざるを得なかったのは残念だが、残せる材料はできるだけ残そうとしたこと、フロアリングや階段の段板に木を使い、樞を銅製にするなど、当初の状態の再現に配慮したことは評価してよい。



▲設備配管はガラススクリーンの中へ

今後は、生活科学部本館の残り半分と微生物堂の改修が予定されています。

生活科学部に管理栄養士養成課程が発足

食物栄養学科教授 脊山 洋右

生活科学部の食物栄養学科は文部科学大臣及び厚生労働大臣から管理栄養士養成課程として認定され、東京都知事から養成施設としての指定を受けて、平成十六年度入学生から卒業時には管理栄養士の国家試験を受験する資格が与えられることになりました。

平成十二年四月の栄養士法改正に基づいたもので、栄養を通じて国民の健康問題を見直すために、人間栄養学的な教育と研究に重点を置いて医学的な知識、カウンセリング、行政などに関連した教育を強化したカリキュラムが新たに加わりました。本学の教員が中心となつて「スタンダード栄養・食物シリーズ」という全十五巻十七冊からなる教科書を企画し、既に十冊を刊行したのもこの新しいカリキュラムに対応したものです。

食物科学講座として家政学部時代からこれまでに培ってきた基礎科学の研究と教育を減らすことなく、これからは大学院と一貫した教育を行つてわが国の管理栄養士養成施設における教育研究のリーダーを育てることを目指しています。学生定員は三六名ですが、この四月には一前期として三七名が入学しました。彼女達が一人前の指導者として巣立つまでには学部と大学院を合わせたと十年近くかかりますが、それを育てる教員スタッフと教科書は着々と整いつつあります。

教育の第三の柱である施設は、平成十五年度に行われた生活科学部本館の改修工事の際に全面的に施工され、ハサップ対応の大量調理実習施設を始め、基準に適合した環境が整いました。大学の独法化と期を一にして新しい課程がスタートできたこと、感慨深いものがあります。

梨花女子大学へ留学して

文教育学部 人間社会科学科
心理学コース四年 阪田 裕里子

私は、二〇〇三年度、本学からの交換留学生として韓国の梨花女子大学へ留学しました。梨花女子大学は、韓国を代表する歴史のある名門女子大です。学生数も多く、自然豊かで、古い欧米式の煉瓦造りの建物とともに現代的な建物が並ぶキャンパスはいつも多くの女子学生達が行き交っています。私たち、交換留学生の普段の日課はというと、午前は留学生のための語学（韓国語）の授業を受け、午後は英語による講義、または一般の授業を選択し、梨大の学生とともに受けるというもので、積極的な留学生や勤勉な梨大生の雰囲気の中で学ぶことができました。留学生が主催のフェスティバル等、年間を通していくつかの行事にも参加しました。この留学は、異文化での生活体験、韓国語の習得ばかりでなく、普段の生活では交流が難しい人々と出会えたという点において、自分に大きなプラスとなったと思います。韓国の学生達、教師の方々はもちろん、様々な文化から来た留学生の仲間たちと出会い、一緒に活動したことは、国際的な視野を広げるとともに、日本について、自分について考える機会を与えてくれました。



▲キャンパス内の教会



▲留学生主催のフェスティバル

お茶の水女子大学 貴重資料紹介

文教育学部教授 秋山 光文



▲矢澤弦月「昭憲皇太后像」

本作品は、昭和七年に完成した徽音堂のために、昭和九年に大学が依頼し完成したもので、本学の創設に深く関与した昭憲皇太后の肖像を描いたもの。作者の矢澤弦月（本名貞則）は大正十年から本学の美術担当教官を務めた日本画家で、信州諏訪に生まれ、東京美術学校日本画科を卒業後、長く文展等で活躍した。この絵の原画となつているのは、お雇い外国人エドアルド・キヨッソーネが明治二十一年一月に描いたコンテ画で、実際には丸木利陽がこれを写真版に複写したいわゆる「御真影」が用いられたと思われる。原画にあった背景をすべて金地とし皇太后のみを描出しているが、モノクローム（白黒）写真を元に描いているためにドレスとケープの繋がりに不自然なところがある。本作品と対に描かれた「明治天皇像」（松岡映丘筆）と共に、日本画の技法で描かれた天皇・皇后の肖像画は極めて珍しく貴重である。戦前まで徽音堂の舞台両脇に懸けられ、儀式の時のみ覆いがはずされたという。



▲ケシ栽培から農業へと転換希望しているマルウ族の部落
病院を背景に小学校の生徒との記念写真

ミャンマーの麻薬地帯の 消滅のための活動

生活環境研究センター教授 佐竹 元吉

麻薬(ケシ)や覚醒剤は身近にないようですが、今では覚醒剤の低年齢の使用が広がってきています。国連麻薬委員会の発表によると薬物乱用状況は世界的に悪化傾向を示しており、国連のデータでは二〇〇〇〜二〇〇一年の世界の薬物乱用者数は約二億人と推定されています。薬物別には、大麻乱用者が約一億六二〇〇万人と最も多く、次いで覚醒剤乱用者が約四二〇〇万人、あへん系麻薬(ケシ)乱用者が約一四〇〇万人、コカイン乱用者が約一四〇〇万人と推定されています。

乱用薬物のうち覚醒剤は世界で二番目に多く、その乱用者数は世界人口の約〇・七%を占めています。地域別には、アジア二二〇〇万人、欧州六〇〇万人、北米六〇〇万人、南米三〇〇万人、アフリカ二二六万人、オセアニア一八万人と推定され、アジアが最も多くなっています。アジアのなかでアンフェタミン系興奮剤が乱用薬物の



▲研修薬草園(ミャンマーカチン州セイロン村)

刻な問題となっています。

タイ、ラオス、ミャンマーのこの地域はゴールデントライアングル(黄金の三角州)と呼ばれ、麻薬(ケシ)の生産地となっています。

ケシの栽培者は、山岳の少数民族の人達です。少数民族の部族の維持には欠かせない収入源となっています。この人達に、ケシ以外の植物を植えて、麻薬から手を引いて貰う試みを、本学の生活環境研究センターで行っています。これは、ミャンマー政府の許可の下で、国連麻薬委員会、厚生労働省、日本大使館と連携して行っています。また、この研究は、「ミャンマーにおける少数民族の生活環境に関する伝統的知識の科学的解明」として今年度の科学研究費補助金(基盤研究費(B))に採択されました。

この研究の主な内容は、ミャンマーの山間に薬用植物園を作ることです。そこで、地元の人達に、三年間の栽培技術の研修を行い、修了後、種苗を与えて、ケシ栽培地で新しい薬草や果樹を栽培してもらいます。

一位となっている国は、フィリピン、タイ、日本などであり、二位は、中国、インドネシア、オーストラリアなどがあります。アジアにおける覚醒剤の乱用は憂慮すべき深

研究では新しい資源植物の探索も行っていきます。ミャンマーのトリユフ類やツクバネソウ類の成分研究を行っています。

昨年、生活科学部の四年生二人がミャンマーの研修活動に同行しました。研修現場はミャンマーの山奥にあり道路はでこぼこで、その上、民族紛争のある地域だったため、今回の研修活動にはミャンマー国軍の護衛が付きました。

研修現場では約百種類の植物が導入されていました。今回の視察で導入されたほとんどの植物が生育良好でした。その他、ミャンマーの野生ラン、薬用ニンジンなど多くの薬草も見つかりました。

研修に同行した二人の学生はミャンマーの食事情とトイレ事情の調査をし、大変面白いレポートを提出しました。食事情調査をした矢澤さんは、竹筒を使ってご飯の炊き方を学びました。トイレ事情の調査をした赤石さんは、ミャンマーのトイレと水飲み場が近いことから日常生活が大腸菌で汚染されていることを調べました。



▲軍の警備員とプロジェクトチーム

ミャンマーは民主化の問題で国際的に孤立していますが、親日的な国民性で私達の活動も順調に動いています。新たな研修現場として第二カチン独立軍の地域にもニンジン、ベニバナ、モモなどの栽培地ができました。

理学部 一般公開

お茶の水博士の体験授業

去る三月二十日(土)、理学部によるお茶の水博士の体験授業が開催されました。「虐待のメカニズムを考える」など理学部教員の講演の他、理学部五学科による体験授業、研究室公開、パネル展示が行われました。

当日は冷たい雨にも関わらず、中・高生や一般の方あわせて約二百名の参加があり、教員との質疑応答や体験授業を通じて、「理学」とは何かを知っていた、たく良いきっかけとなりました。



▲酵素を使った実験



▲表面張力の実験

退職教員紹介

教育学部 人文科学科 言語文化学科	教授 内藤 博夫
理学部 情報科学科	教授 小池美佐子
生活科学部 人間生活学科	教授 佐藤 浩史
人間生活学科	教授 袖井 孝子
人間発達科学専攻	助教授 田代 和美
人間発達科学専攻	助教授 箕浦 康子
人間発達科学専攻	助教授 勝野 正章
子ども発達教育研究センター	教授 無藤 隆

新任教員紹介 (「」は研究テーマ)

教育学部 言語文化学科	教授 高崎みどり
「日本語の文章・談話分析、言葉とジェンダー」	
言語文化学科	助教授 戸谷 陽子
「アメリカ舞台芸術および公共の文化芸術政策」	
理学部 情報科学科	助教授 萩田真理子
「組合せ論・暗号理論」	
情報科学科	講師 菅 牧子
「数学教育」	
生活科学部 食物栄養学科	講師 赤松 利恵
「行動科学に基づいた栄養教育」	
大学院人間文化研究科 発達社会科学専攻	助教授 岩壁 茂
「臨床心理学、心理療法過程の研究」	
大学院人間文化研究科附属心理臨床相談センター	講師 武田(六角) 洋子
業務内容	
「本学附属学校園へのスクールカウンセリング」	
ジェンダー研究センター	講師 杉橋やよい
「ジェンダー統計、統計による男女の賃金格差の研究」	
子ども発達教育研究センター	教授 高濱 裕子
「保育者の成長親としての成長対人システムに出現する変化」	
「コミュニケーション能力を育てる国語科学習指導法の開発」	講師 宗我部義則
糖鎖科学教育センター	講師 清水 由紀
「幼児期から成人期までの他者認知の発達過程」	
糖鎖科学教育センター	教授 辻 崇一
「糖鎖の機能研究」	
ライフワールド・ウオッチセンター	教授 増田 優
「化学物質総合管理理学・社会技術革新学」	
総合情報処理センター	講師 佐藤 祐子
「風車まわりの流れの数値シミュレーション」	
開発途上国女子教育協力センター	講師 山本 綾
「英語および日本語の会話の話題構造」	

公開講座のご案内

「キャンパスの樹木と草花」
キャンパスを歩きながら、色とりどりの美しい草花を一緒に見つけましょう。
六月二十六日(土)、九月十八日(土)、十二月十一日(土)
午後一時半〜三時 受講料全三回五二〇〇円、二回のみ三八〇〇円、一回のみ二〇〇〇円

「親子パソコン教室」
親子で夏休みの思い出を作りましょう。パソコンに不慣れでも大丈夫です。
八月七日(土)、二二日(土)、二八日(土)
午前十時半〜十二時 受講料五二〇〇円

「文学の森を歩く―日本文学をあなたと」
はるか万葉の古代からモダンな息吹く現代まで、この秋、ともに文学の森を歩きましょう。
十一月六日(土)、十三日(土)、二十日(土)、二十七日(土)
午後一時半〜三時 受講料六二〇〇円

詳しくは本学ホームページをご覧ください。
<http://www.ooh.ac.jp/kouka/>
問い合わせ先 企画広報課 〇三五九七八一五二〇五
五月三十一日(月) 開学記念日
六月十二日(土) お茶の水フェスティバル
七月十九日(月) オープンキャンパス

編集後記

本学は海外二十余の大学と国際交流協定を結んでいます。今回は、その一つである梨花女子大学(韓国)に留学した学部四年生に、留学先の紹介と体験談をお願いしました。
記事にもありますように、理事会には学外理事をお迎えし、生活科学部本館改修においても学外アドバイザーからご助言をいただきました。これからの大学には学外の皆様のお力添えが益々重要になります。今後ともお力をお貸し下さいますようお願い申し上げます。(編集長 柴坂)

【表紙の写真】上から、シロヤマブキ、アカカタバミ、ユキノシタ。いずれもお茶の水女子大学構内の植物です。写真提供：生活環境研究センター佐竹元吉教授